

最終報告書

1. 事業の概要

事業名	気仙沼大島復興マラソン大会（気仙沼大島ランフェスタ）開催による地域活性化事業				
開始日	2012年3月1日	終了日	2012年5月31日	日数	92日
団体名	気仙沼大島ランフェスタ実行委員会				

総額（税込）	3,000,000円	スタッフ人数	
--------	------------	--------	--

事業目的	<p>被災地である気仙沼大島（大島）において、島民が主体となったマラソン大会を開催することで震災後離れ離れになっていた島内の融和を図り、活力の失われていた島に活気をもたらす。また、島の大きなイベントであったマラソン大会を、今後は島民が主体となって継続的に開催していけるための仕組みを構築する。そして、今回の大会を通して県外の参加者と大島の交流を醸成し、地域内外から人が集まり活気溢れる大島の再興を目指す。</p>
事業背景	<p>【団体概要】 気仙沼大島ランフェスタ実行委員会は、大島観光協会、大島地区振興協議会、自治会、婦人会など島の住民代表によって結成された任意団体である。実行委員会の下には事務局を設置し、実務は事務局が中心となって行っていく。</p> <p>【背景】 気仙沼大島（大島）は、気仙沼からフェリーで約20分の場所に位置する人口約3,200名の離島で、島の主な産業は漁業及び観光業である。島内には十八鳴浜や小田の浜海水浴場をはじめとした観光名所が点在し、震災前には島の魚介類や自然を求める観光客が大島を訪れていた。中でも、毎年4月の第3週目に開催されていた「河北新報気仙沼つばきマラソン」（以下、つばきマラソン）は、河北新報が主催する過去28年間続いた歴史あるマラソン大会で、この時期には県内外から観光客及びマラソン参加者が多数大島に集まり、島民総出で大会を盛り上げる大きなイベントとなっていた。しかしながら、昨年3月11日の東日本大震災により、大島は広範囲に渡って甚大な被害を受け、震災後約11ヶ月が経つ現在でも漁業及び観光業の復興の目処は立っていない。「つばきマラソン」においては、昨年（第29回）に引き続き、今年も大会の開催中止が決定した。2年連続の大会の中止に島民の落胆は大きく、大会中止という事実が復興への道のりの遠さとして島全体に暗い空気をもたらしている。このような状況の中、島内では島の活性化及び再興となるきっかけとして、そして大会の開催自体が島民にとって復興に向けた大きな希望となるため、今年も「つばきマラソン」に代わる形でのマラソン大会の実施を求める声が強くあがっている。また、震災以前から今後の継続的な大会の運営に向け島民が主体となって運営していく体制への切り替え求められていた。そのためには、今までは島外に頼っていた企画・運営面の大半を大島の住民で実施する必要がある、大会からの収入で経費が賄えるような仕組みづくりが欠かせない。そのような背景から、今回パートナー協働事業として、大島主体による運営体制の構築と、継続的</p>

な大会実施に向けた仕組みづくりに重点を当て、「つばきマラソン」に代わる新しいマラソンイベント実施を支援する意義は大きい。

【事業内容】

大島住民が主体となって取り組む復興マラソンイベント「気仙沼大島ランフェスタ～楽しむことが支援になる～」（気仙沼大島ランフェスタ）を2012年5月27日に実施する。同マラソン大会においては、今後のマラソン大会継続を視野に入れて島民主体での企画／運営体制づくりを支援すると共に、大会経費の面でも持続的な運営が可能となるような仕組みの強化を行う。大会を通して「大島の強さ、そして美しさ」を多くの人に知ってもらえる機会を創出し、今後は地域内外から人が集まり活気が溢れる大島の実現につなげていく。

①気仙沼大島ランフェスタの企画と運営体制構築のサポート

以前の「つばきマラソン」においては、河北新報社のスポンサーのもと、気仙沼市陸上協議会が主管として大会運営を担当しており、大島島民においては大会当日の運営協力に参加するという位置づけであった。また、大会参加者の大半が地元を中心とした近辺地域からの参加者で、マラソン大会は定例の市民大会として内容を工夫する必要性が低かった。しかし、今後島内でのマラソン大会実施を実現していくためには、島民が主体で企画・運営を行っていくことが求められ、同時に今後の継続的な運営を目指し収益性も上げていくためには、大会と島内の観光資源を結びつけ、参加者とのコミュニケーション方法、PR、サイドイベントの実施、物品販売などを工夫して行くことが必要である。

そのため、今大会においては、企画・運営、また外部発信への仕掛けづくりに関して、スポーツイベント企画運営の専門業者（アンビションアクト）やこれまで大島にボランティア活動のため社員派遣を行ってきた富士ゼロックス社等からのサポートやアドバイスを受けて、次回大会からは実行委員会だけで大会運営が出来るような体制を整える。具体的には、実行委員会の下に実際の作業を行う事務局を設け、この事務局に対してアンビションアクトが企画の提案、運営面でのサポートやアドバイス、外部PR面での協力などを行っていく。そして島外からの大会参加者がまた大島に訪れたいような大会を創出していく。

<大会アウトライン>

実施日時：2012年5月27日（日）10：00～

マラソン競技種目：20km（ハーフマラソン）、10km

マラソン参加者人数（先着順）：1,000名（県外参加者：300名、県内参加者：700名）

協力：株式会社アスロニア、株式会社アンビションアクト、株式会社サニーサイドアップ、社団法人TEAM NIPPON、富士ゼロックス株式会社

企画運営：気仙沼大島ランフェスタ実行委員会

②気仙沼大島ランフェスタの実施とイベントの開催

当日の大会実施に際しては、大島島内の学校、自治会、婦人会、商店、宿泊施設などあらゆる住民の協力が欠かせず、一方で警察署や消防署、市役所とも連携して当日の運営を行っていく必要がある。さらに、内部外部からの当日ボランティアの呼

びかけと調整、気仙沼側の駐車場の確保、建設業者との道路工事日程の調整など大会当日に向けて行うべきことは多い。それらの業務に当たっては、事務局がタイムラインや役割分担を作成し、各関係者と密に連絡調整を行いながら当日の運営がスムーズに進行出来るよう働きかける。特に大会当日にはスタッフマニュアルを作成し、各事項の担当者および責任者、スタッフ間の連絡方法、コースと休憩所や救助テントの配置、緊急時の避難場所や避難経路、病人やけが人の救助方法、その他留意点などを明記し、当日多くの関係者が共通の指示に従って行動できるような体制を取る。

加えて、大会前日には前夜祭を、当日にはサイドイベントを実施することにより、参加者や外部ボランティア達が大島の人々と交流し、大島の自然、文化などあらゆる資源を活かして大島の魅力を大会参加者に知ってもらう機会とする。サイドイベントとしては、大島の特産品の販売や屋台（兜焼、その他大島の資源を活かした食べ物）の出店、コンサート、また被災当事と復興の状況を伝えるパネルの展示などを予定している。前夜祭やサイドイベントに関しては、大島の商店会や自治会への参加を促すと共に、企業や有名人などの協力も呼び込むことを検討している。

また、大会参加賞としては草木の苗を配り、それを帰り道に被災した道路沿いに植樹してもらうことで、参加者が被災地のことを忘れず、また継続して大島を訪れたいと思えるきっかけづくりをする。そして、今後の復興に向けて県外からのパワー（笑顔）と島民のパワー（笑顔）が大島に活力をもたらすことを目指す。

【期待される効果】

震災後、多方面から支援が入ることで大島の住民同士の協力の機会が少なくなり、島民の気持ちが離れ離れになっていた節がある。当事業の実施は島民が一体となって復興に向けて取り組むきっかけを生み、今後の大島の復興を大きく後押しする力となる。また、県外からの参加者に被災地を見て知ってもらうことは、県外の人々が被災地を忘れることなく、今後も大島の復興に協力していきたいと思える動機につなげることができる。加えて、島の人との交流、イベント、植樹を通して大島のファンを作り、この先観光客やマラソン参加者が継続して大島を訪れ島に活力をもたらしていくような流れをもたらすことが期待される。

事業内容

- ①コンポーネント 気仙沼大島ランフェスタの企画と運営体制構築のサポート
- ・マラソン大会実施に向けた運営体制の構築
 - ・運営マニュアルと大会要綱の作成
 - ・専門家による企画運営に対するアドバイス
 - ・持続的な大会運営に向けた仕組みづくり
 - ・参加者募集も含めた広報：ホームページの設置、管理、大会パンフレット・リーフレット作成

- ②コンポーネント 気仙沼大島ランフェスタの実施とイベントの開催
- ・マラソン大会を5月27日に開催
 - ・前夜祭と当日イベントの企画と開催
 - ・参加賞の苗木の配布／植樹
 - ・大会およびイベントに向けた事前準備と関係者間との連絡調整
 - ・当日ボランティアの募集と調整
 - ・気仙沼市、警察署、消防署、学校などとの連携
 - ・当日スタッフマニュアルの作成
 - ・協力企業へのイベントサポート呼びかけ

2. 事業の評価（評価者： 桑名 恵／お茶の水女子大学）

最終評価実施日：2012年11月5日（月）

(a) 妥当性：事業開始当時の状況やニーズに合致していたか、事業実施のタイミングは

よかったか

- 毎年行われてきた「つばきマラソン」大会が震災後2回連続中止になったり、震災後緊急事態が続いたことで、大島島民が島の復興に複雑な思いを抱える中、行政主導の「つばきマラソン」に比べてより住民主体の運営に転換する形で行う「ランフェスタ」は、復興への起爆剤として多くの島民の要望により実施に至った。
- 事業計画時点から実施までの期間は半年足らずで十分な準備期間をもつての開催ではなかったが、観光シーズンの幕開けとも重なり、緊急事態を脱した後の復興への意欲や島民の結束を高めつつ、他被災地への復興へのインパクトを波及させるうえにおいては、ベストタイミングでの事業実施であった。

(b) 有効性：目的の達成率

- マラソンという大きなイベントの開催によって、緊急時の特殊な状況を乗り越えた島内の住民が、自らが主導して協力し合うプロセスを作り、島内の住民グループ間の結束の強化、融和に貢献した。
- 島民が中心となる大会実行委員会が主導して、島民が様々な形で「ランフェスタ」を運営し、県外参加者との交流があるイベントを開催することで、大島島民の前向きな生活意欲の向上や経済効果につながり、物心両面で島の活気を高めた。
- ただし、マラソンを継続的に開催するための仕組み構築は、本事業のみで達成されていないと考えられる。準備期間が短い中、効率的なイベント運営や、被災地外からの参加を増加させるために、スポーツ運営会社への委託体制がとられたが、「ランフェスタ」の開催に優先順位が置かれ、大会運営のノウハウの伝達や、住民との戦略の共有などが十分でなかったからである。しかし、「ランフェスタ」の開催が、島民に多くの経験や教訓をもたらし、今後島としてマラソン大会をどのように運営するべきかを考える貴重な機会を提供した。
- 7割（約900人）の県外参加者が参加することによって、島民にとっては応援、運営、宿の受け入れなどを通じて、また参加者にとっては東日本大震災支援という意味で、「ランフェスタ」は大島島民とマラソン参加者の絆を強める場となった。「ランフェスタ」当日は天候にも恵まれ、島民にとっては県外からのパワーをもらい、参加者は被災地支援への思いを高めることによって、島民、参加者の双方の満足度が非常に高いイベントとなった。

(c) 効率性：インプットに対してアウトプットがどれくらいあったか、手法は正しかったか

- 運営体制の構築にあたっては、現場側は大会実行委員会事務局が担い、全体的な運営や企画、メディア対応をスポーツマネジメント会社に委託して、多くのスポンサー、県外参加者を集め、大々的かつ効率的な大会運営が実現した。
- 県外参加者の宿泊と交通機関の確保は、震災の影響によってサービスが限られている中、県内参加者が中心であった「つばきマラソン」では経験しなかった初めての対応であったため、関係者にとって大きな挑戦であったが、大会実行委員会、観光協会、島民が協力して柔軟な対応したことが、大規模なマラソン大会の成功につながった。
- マラソンイベントの開催という意味では成功をおさめたが、大会実行委員会とスポーツマネジメント会社が、事前に大会のイメージ像、大会運営の方向性を共有し、役割分担などの調整を行いながら進めることが容易ではなかったため、現場が混乱する面があった。しかしながら、短時間でイベント開催であり、震災後の特殊な状況においては、ある程度のコミュニケーションの混乱の発生は避けられないことであると考えられる。「ランフェスタ」のもたらした成果を考えると、「ランフェスタ」を開催した意義は大きい。準備プロセスで直面した課題は、今後のイベント開催にいかに関訓として改善に反映できるかが重要である。今後に向けて、反省会などを開催し、前向きな検討の機会を持つことが望まれる。
- 「つばきマラソン」のノウハウを知るスタッフの関わりを確保することで、市役所、警察署、陸上競技連盟からの協力が円滑に得られ、効率的な運営がなされた。
- 当日の「ランフェスタ」では、マラソン大会に加えて、サイドイベントが多く企画された。一部のサイドイベントでは、マラソン参加者の活動のタイミングと合わず、参加者がほとんどないイベントも発生したため、今後の開催にあたっては、イベントの焦点を見直す必要がある。

(d) 調整の度合：いかに被災地コミュニティと連携できていたか、終了時のタイミングや方法はどうか

- 本事業は、島民、行政機関、企業、NPO等、多数のアクターとの調整の下、多くの人々協力を得て実施された。
- 島内では、主要な団体（自治会、婦人会、交通安全協会）、学校、公民館、商店、宿泊施設等が協力し、また当日の応援については多くの島民がボランティアで独自に応援に参加し、多くの島民の関わりによって実現した島あげてのイベントとなった。
- 被災直後から長期間大島のボランティア活動にかかわってきた富士ゼロックス、シビックフォースの仲介による企業、スポーツマネジメント会社が募ったスポンサー等、外部から集まった多くの支援を調整することで、大々的なイベントに繋げた。
- 今後、継続的な運営につなげる点においては、主要な団体外の島民の参加をどのように促すのか、大会実行委員会とスポーツマネジメント会社との連携をどうするべきか等、調整で見えてきた課題を再検討する機会が必要である。

(e) 波及効果・インパクト：当初の目的以外に得られた効果、課題

- 「ランフェスタ」実施に向けて、行政によって、マラソンコースにおける大島島内の道路修復が迅速に行われたことが、島の日常生活の再建にも大きく貢献した。

- ランフェスタの開催を成功させた影響を受けて、その年の夏大島が宮城県でもっとも早く開かれた海水浴場となった。「ランフェスタ」は観光産業にも良い影響を与えた。
- 県外の参加者が多かったことで、「つばきマラソン」開催時の数倍にあたる島内の経済的効果をもたらした。

(f) 新規性・独自性：新しいアイデアや工夫が取り入れられているか、他被災地のモデルとなり得る事業か

- 「ランフェスタ」は、県外参加者を迎えての初めての大きな被災地のマラソン大会を開催であり、被災地支援という視点も取り入れ、「つばきマラソン」にはなかった外部参加者、組織を繋ぐ新しい工夫がなされており、参加者の被災地への思いを高め、被災者にとって復興にも弾みとなる素晴らしいモデル事業となった。

3. 評価者の所感

「ランフェスタ」は、被災後1年という時点で開催にこぎつけたこと自体が、大島の活気を高めるうえで、大きな成果であったと考えられる。短い準備期間であることや、震災後の制約の多い環境での開催ということで、準備プロセスには様々な困難があり、本事業のみは今後の継続的な運営体制を残すまでには至らなかった。しかしながら、「ランフェスタ」を開催した経験、自信、教訓により、住民自らが、今後の長い大島の復興プロセスの中で、マラソン大会をどう位置付けていくのか、また大きな視点で島の復興をどう進めるべきか等を考える貴重な機会を提供した。今後のフォローアップとして、「ランフェスタ」で経験した成果と反省を踏まえながら、住民による大島のまちづくりの動きにつながるような働きかけが展開されることを望む。